

銀輪ノ翁、東都徘徊ス

GINRIN NO OKINA TÔJÛTO HAİKAI SU

伊藤 礼



和田本町回遊記

和田本町にいたのは七十年前だった。昭和十一年から太平洋戦争さなかの昭和十八年まで。私の年齢でいうと三歳から十歳までである。

ここにいたのが少年時代だったためにちがいない。私はその後暮らしたほかのどこよりも和田本町に郷愁を抱いていて、今まで何度か戻って来ている。そして来るたびに、神田川と善福寺川の合流点に佇む。ここに佇むのは、ここならいつまで佇んでいても人に怪しまれないだろうと思うからだ。

少年の頃、合流点の善福寺川のほうには、大きな子供たちの魚捕りに行って行ったことがあった。上流の斉美学校のほうまで行っただと思うが、そのとき、私は田圃の小川が渡れなくて、置いてけ堀を食ってしまった。みんなはどんどん行ってしまふ。そのとき一人残された私に気づいた六年生の子が、子分らしいもう一人の子供に、「テラダ！ あいつをおぶってやれ！」と怒鳴った。テラダというのが戻ってきて私を背負って川を越させてくれた。その子は知らない子だったが、私はテラダという子に、このあたりの小川でお

ぶつてもらったことを今も覚えていたのだ。

私は神田川のほうにも行ってみたかった。しかし小さかったからとても一人では行けなかった。今の私がアマゾン川に一人では行けないと思っっているぐらい、行けそうもないと思った。行くのはもっと大きくなってからのことだと思った。しかしそれをついに果たさぬまま、川はコンクリートの溝になってしまった。和田本町にやってきて、町をひとまわりしたあと、最後にここに来て合流する水を眺めるとき、いつも私は果たせなかった願いを思い出している。

和田本町で最初に行くのは昔住んでいた家だった。昭和三十年頃まで家はそのままだった。貸家で、同じ作りの家が四軒、田の字の形に配置されて建っていて、私の家は道路に面した一軒だった。

近くに行つてなつかしい家を眺める。二階家である。玄関を入つたところに三尺のたたきがあつて、上がったところが一畳半の畳敷き。右が二階への階段。左が茶の間への廊下だ。台所は一坪の広さが二分されて片方にガス台、片方に流し。蛇口の取っ手は真鍮だ。茶の間の入り口の柱はタマという猫が爪研ぎに使つていたからかなりひどい引つ掻き傷ができていた。最初の

うちは大家が文句を言っていたがあきらめてしまった。それから十年ぐらい経つて行つてみると、四軒のうち二軒が無くなつていた。私の家は残つていた。それからまた十年ぐらいして行つてみると私の家も無くなつて、その跡に三階建てのクリーニング工場が建つていた。いつかはこうなると思つていたが、ついにそうなつた。消えてしまつた家の前に呆然と立つていたとき、私は隣との二尺ほどの狭い隙間に昔の木の塀が奇跡的に残つているのに気づいた。それを見て、私は時々来て、いつまであの塀が立つているか見ていようと決意した。そして、あるとき、それも無くなつてしまつたのを確認した。そのとき、私はなぜか背中の荷を下ろしたように気持ちが楽になつた。

あれからまた二十年ぐらい経つているだろうか。私は合流点の橋から少し下の和田見橋まで来たとき、遊歩道探検はひと休みにして和田本町を回遊することにした。折角自転車であつたからだ。以前は自動車か徒歩だった。自動車は私のような懐古趣味の人間には不便な道具であつたし、徒歩では歩ききれない。自転車の出番だ。探検のほうは、久我山から和田まで来たからそれだけでもいちおうの意味はあつた、と自ら納得す